

看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ

桂 晶子¹⁾、佐藤このみ²⁾

キーワード：認知症高齢者、イメージ、看護大学生、SD法

要 旨

看護大学生の抱く認知症高齢者のイメージを明らかにすること、また、認知症高齢者のイメージと学年との関連を明らかにすることを目的にSD法を用いた質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

1. 認知症高齢者のイメージとして、「尊厳性」、「俊敏性」、「親密性」、「活力性」の4因子が抽出され、看護大学生はこれらの各要素に中立よりやや負のイメージを抱いていた。
2. 中立よりやや否定的側面に傾くものの、「尊厳性」を他の要素よりも高く評価し認知症高齢者を捉えていることが示唆された。
3. 学年の進行に伴い「尊厳性」や「親密性」に対する肯定感が高まり否定的評価が緩和された。

以上より、大学での授業や実習を通して認知症高齢者に関する質の高い知識や体験を提供することが看護大学生の認知症高齢者のイメージを形成する上で重要であることが示唆された。

Student Nurses Image of Dementic Elderly People

Shoko Katsura¹⁾, Konomi Sato²⁾

Key words : image, dementic elderly person, student nurse, semantic differential method

Abstract :

The purpose of this study was to investigate using a questionnaire the images of dementic elderly people held by student nurses, and to determine the difference between the images of dementic elderly people held by each academic year group. The following results were obtained:

1. Factor analysis revealed 4 factors; "Dignity", "Agility", "Intimacy" and "Energy". Student nurses had negative images for these factors.
2. "Dignity" was less negative than the other 3 factors.
3. "Dignity" and "Intimacy" were less negative for older academic year groups.

From these results, perhaps it can be concluded that knowledge and experiences gained in university affects the images of dementic elderly people held by student nurses.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University School of Nursing)

2) 大崎市民病院 (Osaki City Hospital)

I. 緒 言

急速な高齢化の進展に伴い認知症高齢者の数も増加し、現在、要介護高齢者のほぼ半数に認知症の影響が認められると言われている¹⁾。また、2005年に約169万人であった認知症高齢者数は、2015年には約250万人、ピーク時には400万人近くになると推測されている²⁾。このような中、2004年に、実態について誤解や偏見を招きやすい「痴呆」という表現から「認知症」への名称変更が厚生労働省の通知によりなされた。また、高齢者の権利利益の擁護に資することを目的とする「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」が2006年に施行され、これと時同じくして「地域包括支援センター」が地域包括ケアを支える中核機関として新たに導入され、その業務の一つとして高齢者に対する権利擁護が規定された。

これらの対策における認知症高齢者の支援のねらいとしては、認知症高齢者が尊厳を保ちながら穏やかな生活を送ることができ、家族も安心して社会生活を営むことができるよう、認知症についての正しい理解を普及させるとともに、認知症高齢者や家族に対する早期相談・診断・支援体制の充実を図ることが挙げられる。

一方、看護学教育の観点から認知症高齢者の支援を考えると、将来、認知症高齢者のケアに携わる可能性のある学生の教育においては、認知症高齢者の尊厳を尊重したケアが提供できる看護職者を育成することが望まれる。また、看護師を対象とした先行研究³⁾では、認知症高齢者のとらえ方がケアの基盤となると指摘されていることより、看護大学生においても認知症高齢者に対するイメージがそのケアに反映すると推測される。したがって、認知症に対する正しい知識を提供するとともに、専門職として適切に認知症高齢者をとらえることができるような教育的支援が重要である。

高齢者や認知症高齢者のとらえ方に関連した先行研究においては、高齢者のイメージに関する研究は比較的数量多く蓄積されている。これらの結果より、小学生・中学生では低学年ほど肯定的イメージで高学年ほど否定的であること、

幼少時の高齢者との交流経験が多いものほど肯定的であること^{4,5)}、大学生では高齢者の活動面や自立面に対しては否定的イメージであるが、温和性や円熟性といった情緒面では肯定的であること^{6,7)}、などが知見として得られている。しかし、認知症高齢者についてはそのイメージに関する研究は数が少なく、また、質的分析を用いるなど研究手法や対象者等が異なるため一定の知見が得られていない。

そこで、本研究はSemantic Differential Method (SD法)を用いて、看護大学生の認知症高齢者に対するイメージを明らかにすることを目的とする。また、認知症高齢者に関して教育的観点から看護大学生に関わる際の示唆を得るために、認知症高齢者のイメージと学年との関連を検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

A大学の看護学部1～4年生を対象に質問紙調査を実施し、有効回答の得られた260人を分析対象とした。なお、A大学看護学部の編入学生を除く定員は各学年90名であり、編入学生は調査対象から除いて調査を実施した。

2. 調査方法

学年あるいは看護実習グループごとに集合調査を行った。その際、研究目的等を説明し、一斉に無記名式質問紙を配布し記入してもらった。回収はその場で回収するか、もしくは既設した回収ボックスに提出してもらい回収を行った。調査期間は2006年10月～11月であった。

3. 調査内容

1) 対象者の背景

(1) 属性

年齢、性別、学年を把握した。

(2) 高齢者との接触状況

祖父母との同居経験の有無を把握した。

(3) 認知症高齢者との接触状況、情報源

認知症高齢者と接した経験の有無と、接した場所を複数回答にて把握した。さらに、

認知症高齢者に関する情報源について以下の6項目、つまり、「新聞やニュース等のマスメディア」、「大学での授業」、「書籍」、「認知症高齢者と直接、接した経験」、「認知症高齢者に接した事のある人からの話」、「その他」を設定し、最も当てはまるもの2つまでを選択してもらった。

2) 認知症高齢者に対するイメージ

中野らのSD法における老人イメージスケールを適用した⁸⁾。これは17形容詞対からなり、否定的な極から肯定的な極へ順に1点から5点が配点され3点が中立点となる。

4. 分 析

認知症高齢者に対するイメージは各形容詞対の平均値を算出した。また、因子分析を行い因子を抽出し命名した。さらに、認知症高齢者のイメージと学年との関連を検討するため、対象を学年によって「1・2年生」と「3・4年生」の2群に分け、各因子の平均値をt検定により比較した。

5. 倫理的配慮

対象者へ質問紙を配布する際、調査の目的と主旨を説明した後に、調査は無記名であることに加えてデータ全体をコンピュータ処理するため個人が特定されることは決してないこと、研究協力は自由意志によるもので断っても不利益を被らないこと、質問紙の提出をもって調査に同意が得られたものと解釈することを依頼文を添えて説明し調査を実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の背景

1) 属性

対象者の属性は表1に示すとおりである。平均年齢は20.4±2.0歳であり、性別は男性21人(8.1%)、女性239人(91.9%)であった。学年は、1年生80人(30.8%)、2年生51人(19.6%)、3年生64人(24.6%)、4年生65人(25.0%)であった。

表1 対象者の属性

			N=260
			mean±SD
平均年齢			20.4±2.0歳
性 別	男 性	21 (8.1)	
	女 性	239 (91.9)	
学 年	1 年 生	80 (30.8)	
	2 年 生	51 (19.6)	
	3 年 生	64 (24.6)	
	4 年 生	65 (25.0)	

2) 高齢者との接触状況

祖父母との同居経験について、全学年では「同居経験あり」は147人(56.2%)、「なし」は114人(43.8%)であった。同居経験の学年別の内訳は表2上段に示すとおりであり、学年間において同居経験有無の割合に違いはみられなかった。

3) 認知症高齢者との接触状況、情報源

認知症高齢者と接した経験の有無について、全学年では「経験あり」は137人(52.9%)、「なし」122人(47.1%)であった。接触経験の学年別の内訳は表2下段に示すとおりである。接触経験者の割合は、1年生32.9%、2年生35.3%、3年生59.4%、4年生84.6%と学年進

表2 高齢者、認知症高齢者との接触の有無

					N=260
	1 年 生 n=80 人 (%)	2 年 生 n=51 人 (%)	3 年 生 n=64 人 (%)	4 年 生 n=65 人 (%)	
祖父母との同居経験					
あり	50 (62.5)	26 (51.0)	38 (59.4)	32 (49.2)	n. s
なし	30 (37.5)	25 (49.0)	26 (40.6)	33 (50.8)	
認知症高齢者との接触経験					
あり	26 (32.9)	18 (35.3)	38 (59.4)	55 (84.6)	***
なし	53 (67.1)	33 (64.7)	26 (40.6)	10 (15.4)	

χ^2 検定 *** $p < 0.001$

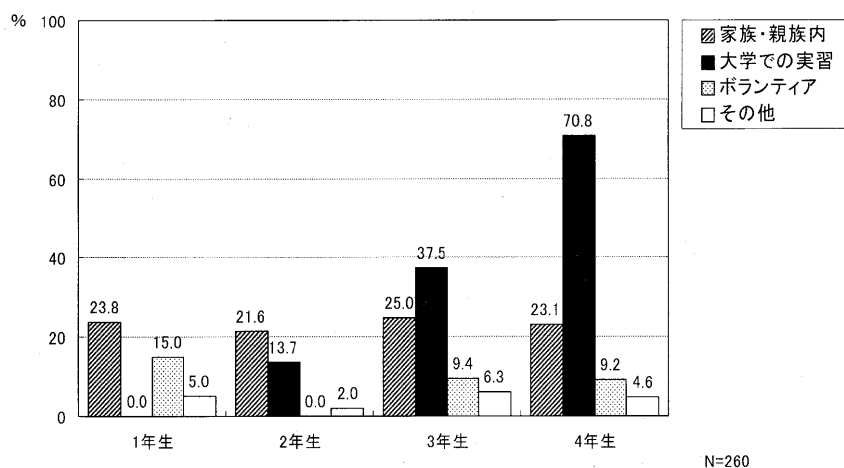


図1 学年別にみた認知症高齢者との接触場所（複数回答）

行に伴い増加し、学年間において接触経験の割合に違いが認められた（ $p<0.001$ ）。

認知症高齢者と接触した場所については、g 学年別の接触者の割合（複数回答）を図1に示した。1年生では「家族・親族内」が最も高く23.8%、次いで「ボランティア」15.0%であった。2年生では「家族・親族内」が最も高く21.6%、次いで「大学での実習」13.7%であった。3年生では「大学での実習」37.5%が「家族・親族内」の25.0%を抜いて最も高かった。4年生では「大学での実習」が70.8%へと大きな伸びを示し、次いで多いのが「家族・親族内」の23.1%であった。

認知症高齢者の情報源については、学年別に情報源としている学生の割合（複数回答）を図2に示した。1年生では、77.5%の学生が

「マスメディア」を情報源としており、そのほかの情報源を抜いて最も高い割合であった。これに対して2年生以上では、何れの学年においても80%以上の学生が「大学での授業」を情報源としており、「マスメディア」がこれに次いだ。さらに、3年、4年生では「認知症高齢者と直接接した経験」の割合が3番目に高くなった。

2. 認知症高齢者に対するイメージの構造

1) 形容詞対の平均値

形容詞対の平均値は図3に示すとおりである。設定した17項目のうち、平均値が3点以上の肯定的評価が示されたのは「暖かい－冷たい」（平均 3.1 ± 0.7 ）の1項目のみであった。一方、平均値が最も低かったのは「速い－遅い」

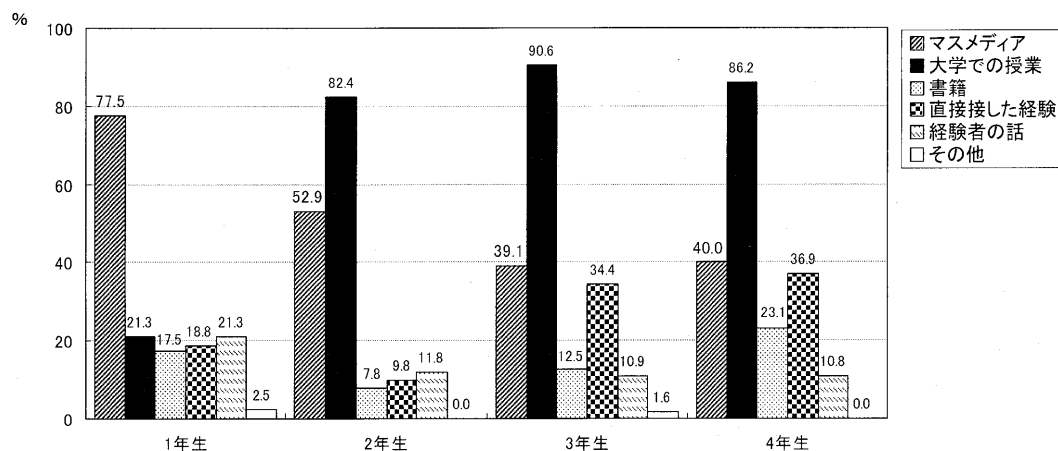


図2 学年別にみた認知症高齢者の情報源（複数回答）

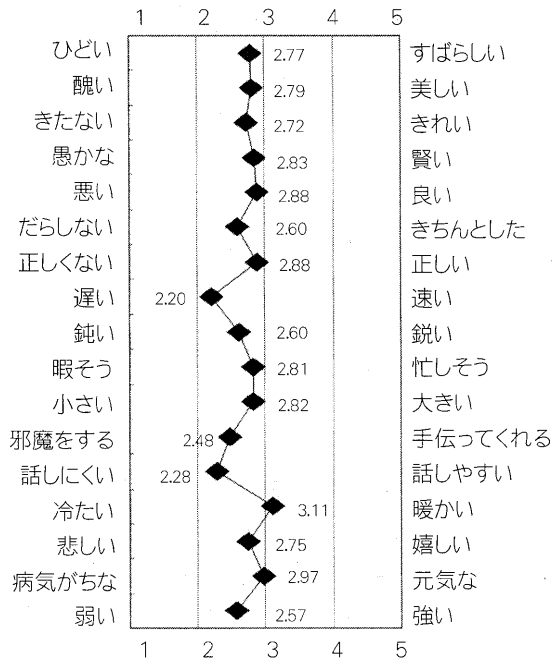


図3 認知症高齢者に対するイメージの構造 (形容詞対の平均値)

い」(平均 2.2 ± 0.7)、次いで、「話しやすいー話にくい」(平均 2.3 ± 0.9)であった。それ以外の形容詞14項目は平均値が2.5点以上3.0点未満の範囲にあった。

2) 因子分析の結果

形容詞対17項目の因子分析を行った結果、5因子が抽出された。しかし、第5因子は固有値が1.01に過ぎずそこに含まれる項目も1項目のみであったため、第4因子までの抽出優先を付した因子分析(バリマックス回転)を再度行った(累積寄与率51.49%)。その結果は表3に示すとおりである。

第1因子は「きれいーきたない」、「すばらしいーひどい」、「賢いー愚かな」、「良いー悪い」等の7項目からなり、人の品格や人間性に関わる項目と解釈し「尊厳性」と命名した。第2因子は「鋭いー鈍い」、「速いー遅い」、「忙しそうー暇そう」等の4項目からなり、動作や行動に関わると解釈し「俊敏性」と命名した。第3因子は、「話しやすいー話にくい」、「手伝ってくれるー邪魔をする」、「暖かいー冷たい」の3項目からなり、関係性を築いたりコミュニケーションを図ったりする要素であ

表3 認知症高齢者に対するイメージの構造 (因子分析結果)

N=260

項目 \ 因子	第1因子 尊厳性	第2因子 俊敏性	第3因子 親密性	第4因子 活力性
すばらしいーひどい	0.708	0.035	0.224	0.015
美しいー醜い	0.650	0.096	0.076	0.147
きれいーきたない	0.650	0.045	0.055	0.103
賢いー愚かな	0.549	0.160	0.256	0.016
良いー悪い	0.540	0.212	0.102	0.111
きちんとしたーだらしない	0.515	0.179	0.143	0.039
正しいー正しくない	0.366	0.070	0.223	0.056
速いー遅い	0.226	0.656	0.079	0.084
鋭いー鈍い	0.132	0.584	0.106	0.106
忙しそうー暇そう	0.131	0.485	-0.126	0.136
大きいー小さい	-0.004	0.320	-0.308	0.038
手伝ってくれるー邪魔をする	0.323	0.063	0.583	0.054
話しやすいー話にくい	0.221	0.068	0.436	0.057
暖かいー冷たい	0.186	-0.128	0.419	0.194
嬉しいー悲しい	0.147	-0.021	0.188	0.595
元気なー病気がちな	-0.003	0.286	0.206	0.562
強いー弱い	0.126	0.274	-0.170	0.548
因子寄与	4.243	1.980	1.445	1.086
累積寄与率%	24.958	36.607	45.106	51.492

因子分析(バリマックス回転)

ると解釈し「親密性」と命名した。第4因子は「嬉しいー悲しい」、「元気なー病気がちな」、「強いー弱い」の3項目からなり、心身の健康に関連すると解釈し、「活力性」と命名した。

各因子の平均値は、第1因子「尊厳性」は 2.78 ± 0.41 、第2因子「俊敏性」は 2.61 ± 0.51 、第3因子「親密性」は 2.62 ± 0.60 、第4因子「活力性」は 2.76 ± 0.61 であった。

3. 認知症高齢者イメージと学年との関連

対象を学年によって「1・2年生」と「3・4年生」の2群に分け、各因子の平均値を比較し表4に示した。第1因子「尊厳性」の平均値は、「1・2年生」群2.74に対し「3・4年生」群は2.83であり、「3・4年生」群の方が高い傾向にあった($p < 0.06$)。また、第3因子「親密性」では、「1・2年生」群2.54に対し「3・4年生」群は2.70であり、「3・4年生」群の方が有意に高かった($p < 0.05$)。一方、第2因子「俊敏性」と第4因子「活力性」については学年間において違いは認められなかった。

表4 「1・2年生」と「3・4年生」間における各因子の平均値の比較

N=260						
学 年	第1因子 尊厳性	第2因子 尊厳性	第3因子 尊厳性	第4因子 尊厳性		
1・2年生	2.74	2.59	2.54	2.75		
3・4年生	2.83	2.64	2.70	2.78		
t検定	§	n.s	*	n.s		

§ $p<0.06$ * $p<0.05$

IV. 考 察

1. 看護大学生の抱く認知症高齢者のイメージ

看護大学生の抱く認知症高齢者のイメージは、設定した17形容詞対のうち、平均値が3点以上の肯定的評価が示されたのは「暖かい-冷たい」の1項目のみであり、残る16項目は平均値が2.20～2.97の範囲にあり否定的評価が示された。また、因子分析の結果として、「尊厳性」、「俊敏性」、「親密性」、「活力性」の4因子が抽出され、各因子の平均値で最も高かったのが「尊厳性」の2.78で、最も低かったのは「俊敏性」の2.61であった。

大学生の高齢者イメージをSD法により検討した先行研究において、保坂ら⁹⁾は、「有能性」、「活動・自立性」、「幸福性」、「強調性」、「温和性」、「社会的外向性」の6因子を抽出し、「温和性」、「有能性」は肯定的評価を、「活動・自立性」に対する評価は6因子中最も低く否定的評価であった述べている。一方、看護職の高齢者イメージについて、鈴木¹⁰⁾は、「活力因子」、「態度因子」、「円熟因子」、「安定因子」、「外観因子」の5因子を抽出し、「円熟因子」、「安定因子」、「外観因子」はやや肯定的に、「活力因子」、「態度因子」は否定的評価であったと述べている。

これら高齢者に対するイメージと、本研究での看護大学生の認知症高齢者イメージを比較すると、「俊敏性」や「活動性」あるいは「活力因子」など身体面に関わる要素に対しては否定的な評価である点が共通している。一方、相違点として、高齢者イメージでは情緒面に係る要素に肯定的評価が示されていたが、本研究において肯定的評価が示された要素はなかった。本研究では、認知症のある高齢者のイメージであり、認知症やそれに伴う症状に対する認識が認知症高齢者のイメージに作用した可能性が考

えられるため、認知症高齢者に対する現実的な受止め方、具体的なとらえ方をしているとも解釈された。

以上より、看護大学生の抱く認知症高齢者のイメージは、認知症高齢者を尊重する観点からの「尊厳性」、認知症高齢者の身体側面における「俊敏性」、認知症高齢者と関係性を図る際の「親密性」、認知症高齢者の「活力性」、これらの各要素において中立よりやや負のイメージを抱いていることが示唆された。さらに、この4要素のなかでは、「尊厳性」が最も肯定的評価に近く、逆に、「俊敏性」が最も低い評価であることが示されたことから看護大学生は、中立よりはやや否定的側面に傾くものの、尊厳性を他の要素よりも高く尊重し認知症高齢者を捉えていることが示唆された。

2. 認知症高齢者のイメージ形成における看護学教育の影響

認知症高齢者のイメージと学年との関連を検討した結果、第1因子の「尊厳性」($p<0.06$)と第2因子の「親密性」($p<0.05$)に違いが認められ、「3・4年生」群の方が「1・2年生」群よりも平均値が高かった。つまり、認知症高齢者をとらえる際の「尊厳性」や「親密性」の要素に対する否定的イメージが学年の進行に伴い緩和されることが示唆された。

この変化の要因として認知症高齢者に関する情報と知識、認知症高齢者との接触が考えられる。つまり、認知症高齢者と接したことのある学生は学年の進行に伴い増加していた。また、認知症高齢者と接した場所は、1、2年では「家族・親族内」が最も多いのに対し、3、4年では「大学での実習」が最多となった。一方、

認知症高齢者の情報源は、1年では「マスメディア」が圧倒的多数であるが、2年以降では「大学での授業」が主たる情報源となり、3、4年では「認知症高齢者と直接接した経験」が増え3番目に多い回答となった。一般市民がもっている認知症高齢者の知識はマスメディアや身近な人々の影響が極めて大きいことや、認知症高齢者に対して否定的イメージを抱いているのが一般的傾向であることなどが先行研究より指摘されている^{11,12)}。本研究においても、看護大学生が大学入学当初に抱いていた認知症高齢者のイメージは、個人的な体験やマスメディアによる情報によって形成されていたと解釈できる。しかし、学年の進行に伴い、大学での授業、実習を通して認知症高齢者に関する正しい知識を得たり、認知症高齢者と直接接したりする過程の中で認知症高齢者に対するイメージが変化し、「尊厳性」や「親密性」に対する肯定感が高まった可能性が考えられる。

先行研究においても、看護学生の認知症高齢者に対するイメージには、1年生はマスメディアと近親の認知症高齢者との関わりが大きく、2年生はマスメディアと看護学実習の影響が大きく、3年生は看護学実習の影響が大きかったとの報告がなされている¹³⁾。また、田中ら¹⁴⁾は、看護学実習における認知症高齢者との接触は学生の好意的な受容感情の形成に深く関わっている可能性が高いと、本研究を支持する研究結果を示している。さらに、縦断調査の結果より、実習は認知症高齢者に対する好意的志向感情を卒業直前まで維持する重要なものであると報告している¹⁵⁾。

本研究において、第1因子の「尊厳性」は「すばらしい－ひどい」、「美しい－醜い」、「賢い－愚かな」、「良い－悪い」、「正しい－正しくない」などの7形容詞から構成され、第3因子の「親密性」は「話しやすい－話しにくい」、「手伝ってくれる－邪魔をする」、「暖かい－冷たい」の3形容詞から構成された。この2つの因子を構成する形容詞対をみても「尊厳性」、「親密性」の要素が肯定的に傾くことは、看護大学生が認知症高齢者と接するとき、認知症高齢者の人間

性を尊重した関わりやケア、認知症高齢者と接する際には温かみをもって向き合うことに繋がるのではないかと解釈できる。そして、それらの因子に対する否定的イメージが学習進度の過程で緩和された背景には大学での授業、実習による知識や体験が影響している可能性が考えられた。以上より、将来、認知症高齢者のケアの担い手になる可能性のある看護大学生が認知症高齢者のイメージを形成する上で、大学での授業や実習を通して質の高い知識や体験を提供することが重要であることが再確認された。

V. 結 論

看護大学生の抱く認知症高齢者のイメージを明らかにすること、また、認知症高齢者のイメージと学年との関連を明らかにすることを目的にSD法を用いて質問紙調査を実施し、以下の結論を得た。

1. 因子分析の結果、認知症高齢者のイメージとして、「尊厳性」、「俊敏性」、「親密性」、「活力性」の4因子が抽出され、看護大学生はこれらの各要素において中立よりやや負のイメージを抱いていることが示された。
2. 各因子の平均値は、「尊厳性」が2.78で最も高く、「俊敏性」が2.61で最も低かった。このことから看護大学生は、中立よりはやや否定的側面に傾くものの、「尊厳性」を他の要素よりも高く評価し認知症高齢者を捉えていることが示唆された。
3. 認知症高齢者のイメージと学年との関連において、第1因子の「尊厳性」($p<0.06$)と第2因子の「親密性」($p<0.05$)に違いが認められ、「3・4年生」群の方が「1・2年生」群よりも平均値が高かった。つまり、学年の進行に伴い認知症高齢者をとらえる際の「尊厳性」や「親密性」に対する肯定感が高まり否定的評価が緩和された。
4. 大学での授業や実習を通して認知症高齢者に関する質の高い知識や体験を提供することが看護大学生の認知症高齢者のイメージを形成する上で重要であることが示唆された。

謝 辞

調査にご協力くださいましたA大学看護学部
の学生の皆様に心から感謝申し上げます。

文 献

- 1) 財団法人厚生統計協会：国民衛生の動向・
厚生の指標. 53 (9) 234, 2007
- 2) 大島一博：今後の認知症対策：日本老年医
学会雑誌, 43 (3) 318-321, 2006
- 3) 長畑多代, 松田千登勢, 佐瀬美恵子他：介
護老人保健施設で働く看護婦の痴呆性高齢者
とその言動に対するとらえ方. 大阪府立看護
大学紀要, 8 (1) 19-27, 2002
- 4) 中野いく子：児童の老人イメージ-SD法に
よる測定と要因分析-. 社会老年学, 34,
11-22, 1990
- 5) 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明他：小学生
と中学生の老人イメージ-SD法による測定と
比較-. 社会老年学, 39, 11-22, 1994
- 6) 保坂久美子, 袖井孝子：大学生の老人イメ
ージ-SD法による分析-. 社会老年学, 27,
22-33, 1982
- 7) 大谷英子, 松木光子：老人イメージと形成
要因に関する研究 (1) 大学生の老人イメ
ージと生活経験の関連. 日本看護研究学会雑誌,
18 (4) 25-38, 1995
- 8) 前掲書 4)
- 9) 前掲書 6)
- 10) 鈴木みちえ：看護職と地域保健推進委員の
老年イメージ調査. 聖隷学園浜松衛生短期大
学紀要, 24, 12-22, 2001
- 11) 櫻庭けい子, 瀧口紀美代, 古屋晴子他：千
葉市における痴呆性高齢者およびその家族の
支援に関する調査研究. 看護研究, 34 (1)
35-49, 2001
- 12) 中野正孝, 櫻庭けい子, 櫻井しのぶ他：千
葉市における痴呆性高齢者のイメージに関す
る調査研究. 三重看護学誌, 3 (2) 21-31, 2001
- 13) 吉本知恵, 横川絹恵：看護学生の痴呆症高齢
者に対するイメージと看護観および影響因子-
3年制看護短大生の学習進度による比較-.
日本看護学教育学会誌, 14 (1) 35-44, 2004
- 14) 田中敦子, 鳴海喜代子：看護学生の認知症高
齢者との接触と受容感情に関する研究. 埼玉
県立大学紀要, 5, 71-80, 2003
- 15) 田中敦子, 鳴海喜代子：認知症高齢者への看
護学生の受容的感情とその影響要因に関する
縦断的調査. 埼玉県立大学紀要, 7, 59-66,
2005